

# 佳作

『武士道』 新渡戸稲造著、矢内原忠雄訳

国際日本学部 国際日本学科 3年 西山陽太郎

日本の道徳や風習はどのようにして始まったのだろうか。この疑問が本書の出発点であった。西洋にはキリスト教があり、宗教教育を通じて道徳を学ぶ。しかし、日本では仏教や神道はあるけれども、道徳とは直接結びついていない。かつての日本人はどのようにして道徳を学んだのか。日本人のあなただったら答えることができるだろうか。

このような疑問の中、武士道の道徳的役割に着目したのが本書である。著者は旧五千円札の肖像で有名な新渡戸稲造博士。1933年、71歳で亡くなるまでには、国連事務次長を務め、国際的舞台上で活躍した。他方で日本の高等教育にも尽力し、近代日本の礎を築いた人物だ。彼の代表作の一つが1899年に書かれた『武士道』である。1899年は日本が日清戦争の勝利から4年後、その5年後には日露戦争を控えていた。世界中が日本に目を向け始めた。そのような背景で、本書は日本の道徳体系としての「武士道」を世界中に広めることを目的として英語で著述された。

本書は武士道を日本人の道徳体系だとするところから始まる。武士道の源流は仏教や神道だが、そこに儒家などの中国思想が合わさって独自に発展したところに特徴がある。その思想は義、勇、礼など様々な概念が統合され武士が守るべき不言不文のルールとして始まった。そこでは武人として常に実践が強調され、高い階級に見合う名誉や品性を重んじることに主眼が置かれる。その思想は後に、平民の間にも浸透し、日本独自の道徳体系や風習として結実したのだ。かつての日本人にも西洋に負けず劣らずの道徳的体系が存在したということの証明、そして武士道の将来までが語られる。

もしかしたら、読者の中には内容が堅苦しうだからと敬遠する人がいるかもしれない。心配ご無用。前述したように本書は外国人に向けて書かれたものである。義や仁などの概念は章ごとに詳しく説明され、より実感して理解してもらうための具体例や西洋思想との比較は豊富である。文章も力強い表現やユーモアのあふれたものが多々見られる。感嘆文が多く感情的に豊かで、生き生きとした印象を与えられる。読者を挫折に導くことで定評のある岩波文庫の中でも、読みやすい部類に入るだろう。日本文化に興味のある人は無論、一つの価値観を模索するという意味においても、本書を手にとることは有用である。外面上は確かに廃れたかもしれないが、日常の小さなところで武士道は生き残っていることがよくわかる。是非、あなたの半生と武士道を照らし合わせてみて欲しい。きつとつながりが見えてくるはずである。著者の「その象徴とする花のごとく、四方の風に散りたる後もなおその香気をもって人生を豊富にし、人類を祝福するであろう」(p. 166)という言葉は間違いではない。昔と比べ格段に価値観が多様化した今、我々の先祖が築き上げた一つの価値観を振り返るということは今を生きる私たちに大きな意味をもたらしてくれるだろう。